日本の印象——一九八三年

スザンヌ・ゲイ

一九八三年の五月から七月にかけて、同志社女子大学と、ヴァージニア州のメアリ・ボールドウィン女子大学との交換計画の一環として、私は同志社女子大の教壇に立つた。私の義務はその夏メアリ・ボールドウィン大学でひと月間をすごす筈の三十一名の学生に英会話を教えることを含んでいた。同時に私は同志社女子大学で何回か日本史に関する講義を行なった。だが、これは私のはじめての日本訪問ではなかった。私は東京で大学の三年次をすごした一九七一年以来、合計五年半にわたって日本に住んだのである。のちほど、大学を卒業してから、日本にやってきて、二年間、大阪大学で日本史を勉強した。二年間たつうちに大学院でさらに勉強を続けたくなったので、帰米してイェール大学の日本史の博士課程に入った。そのコースの単位をおさめ、試験に合格したあとで、博士論文のために再び来日。京都における室町幕府を論文の主題に選び、京都で幸福な二年間をすごすことができた。その期間に再び大阪大学で研究し、京都大学の古文書室で古文書を調べたりした。一九八〇年にイェールに帰り、二年後にPh・D・の博士号をとり、その年の九月にメアリ・ボールドウィン大学の歴史学の助教授になった。そういうわけで私はここ十二年間のうちの半分近くを日本ですごしたことになる。今回の訪日は三年ぶりのことである。日本の社会で気付いたさまざまな変化などについて、いくつかのコメントを書いてみたいと思う。

物価について

一九七〇年代の初期から中頃にかけてのインフレの時代に日本に住んだ者として、日本を異常な物価高の国だと思う習慣がついてしまった。しかし米国でも一九七〇年代の中頃にインフレがきびしくなった。ここ二年間ほどはその勢いがいくらか衰えたとはいえ、その影響はいまなお感じられる。特に食物の値段がはね上がった。アメリカ人の食費は日本人の食費の約半分だった。しかし今ではもうそんなわけにいかない。米国で私はもうステーキを食べることがなくなり、ほとんどの場合チキンをたべている。この五月に日本にきたあくる日に、いつものショックを受ける覚悟で気持を引きしめて市場へ出掛けたのだが、実際に値段を見たとき、もはやアメリカでの値段にくらべてそれほど高くないことにショックを受けたのだった。私の推定では日本

の食品はアメリカのそれより四分の一ないし三分の一程度高いようである。或る種の料金は日本の方がまだうんと安い。たとえばドライ・クリーニングや写真の現像などである。衣料はとんとんであるか、日本の方が少し安い程度。ところで私は日本で土地や家屋を直接に買った経験がない。その意味で私は日本の消費者にとっての、経済の最悪の面から守られている。住宅事情は米国においてすら深刻なものになってきた。以前には「アメリカの夢」の一部は一軒の家を所有することであったし、じじつ、大概のアメリカ人にとってこれは実現可能な目標だった。ところがもはや今ではそういうわけにいかない。それは高い金利のため、そしてまた地価の驚くべき高騰のためである。それでもなお、アメリカ人が日本人よりうんとめぐまれているのは「空間」という領域においてである。現在多くの日本の家庭はアメリカの家庭と同様、電気器具や小さな贅沢品に十分めぐまれているけれども、私が一九七一年にはじめて日本に来た時にくらべると、日本の家庭がより一層窮屈になっていることは事実である。どちらかといえば、状況は悪化したといえる。

全体としての経済事情

日本はヨーロッパやアメリカ同様に不況下にある、と多くの日本人が語っているけれども、表面上日本はまだ比較的繁栄しているように思われる。アメリカの水準から見てよい給料が支払われているし、公式発表による失業率はきわめて低い。日本の消費者たちはもっと気楽にお金を使うことができるようだ。ただし、これは、たった二か月間の滞在に基づいての、主観的で浅薄な判断であることは認めるにしても。アメリカで失業がぞっとするほどの拡がりを見せていること、多くのアメリカ人にとって失業がさし迫った脅威そのものであるということ、この点をどうも日本人は十分に理解していないように思われる。

日本の繁栄をしるしづける小さい、しかし目立つ点は、車をもつ大学生の数がふえたことである。以前は単車がふつうだった。

日本女性の地位

少くとも上流もしくは中流の上に属する婦人たちの間に、地位や行動における大きな変化があったとは思われない。けれども日本の社会全体としてみる場合、働く婦人の数はふえたようで、どうやらそれは経済的な必要性からくるらしい。このことは米国でも同じであって、かの国では労働人口の半数以上が女性なのである。私がきかされたところでは日本の教育制度の中で、まますます激しくなった受験競争のために、最近ではたいていの子供は塾通いをせざるをえなくなり、従って母親が働かなければほとんどの家庭ではこの余分の出費をまかなうことができない、というのであった。このこと自体は日本の女性の「進歩」を表わすものでないことは明らかである。しかしながら、一つ目立つことは現在大阪大学において女性の歴史学専攻大学院生の数が非常にふえていることに大きな好感を覚えた。ただし彼女らが将来男性たちと同じように学問の道を辿れるかどうか、その点になると確かであるとはとてもいえないのだ

が。

日本の男性

日本の男性については、日曜日に家族連れで出かける男性の数がふえたこと、その多くが子供をだいたり遊んでやったりしていることに感銘を受けた、ということだけを述べておきたい。はじめて日本に来た時にはそういう姿はほとんど見たことがなかった。当時は夫婦に数人の子供があっても、面倒を見るのは母親であり、父親は少し離れたところに居るのがふつうだった。

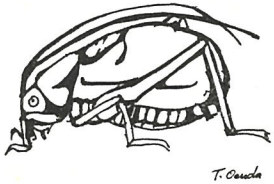
犯罪

ここ三年間に日本のマスコミに報道される犯罪の数は劇的に増大した。この意味で、皮肉にも、日本はアメリカ同様の「先進」国になりつつあると言えないだろうか。しかし私は新聞報道の真実性には疑問をもつものである。なぜならニュースというものはセンセーショナルに扱われることが多いからだ。たとえばその証拠として、アメリカ人は犯罪に関する実際の経験よりも、犯罪の報道によってもっとおびやかされてきた、ということが挙げられよう。このことが日本の新聞についてもいえるかどうか、私は知らない。それはともかくとして、実際のところ日本は比較的安全な国であり、女性が夜間、ひとりでこわがらずに外出できる天国なのである。だが、マスコミの報道が信じられるとすれば、日本における犯罪の大多数は学校と家庭内で起こる。これはひょっとしたら、社会と教育制度の圧力が多くの子供たちにとってあまりにも堪えがたいものになりつつあることを示しているのだろうか。アメリカ社会における圧力と問題の原因は異ったものであるかもしれない。しかし結果は全く似通ったものである。

このような、きわめて皮相な観察から引き出されるような、総体的な結論というものが、はたしてあるだろうか。たとえば、多くの日本人が好んで口にするように、日本はますますアメリカのようになりつつあるのだろうか。私の考えでは、日本は表面的にはアメリカに似ているかもしれないが、日本は依然として独特な社会なのであり、日本の諸問題は日本式にしか解決できない、ということである。それでもなお、過去二、三年の間に、西洋に対する日本人の態度に変化が生じたことに私は気付いた。日本人は自信と成熟の感覚を養ってき、西洋を今までほどには易々と受容れなくなり、全体として西洋に対して批判的になったように思われる。一方において日本人は非常に印象的な技術上の進歩をとげ、そのため多くの分野でどの国にも劣らないところまできた。そしてこのことが日本人に新しい自信を与えた。しかしながら、他方においては、この種の成功の代価——公害など——は、徹底的な近代化の政策がはたして賢明であったかどうかについて、普通の日本人を大いに懐疑的にしたように思われる。日本人はもはや、西洋のものはよいものだ、と自動的に想定することはない。このことは恐らく必然的な、健全な展開なのであろう。しかしそれがちょうど、アメリカ人がマスコミによって、日本のものはほとんど何でもすぐれていると自動的に信じるように仕向けられている時期と一致することになった。日本の社会、企業、

教育等のマイナスの面は殆ど何一つとしてアメリカの新聞に紹介されていないのである。それぞれの国民がやがて、両者たがいによりバランスのとれた見方ができるようになること、そして、相手がどこの国民とも同じく、長所とともに欠点をも備えたふつうの人間の集りであることを認識する日がやってくること――このことを私は希望するのである。

（アメリカ、メアリ・ボールドウィン大学助教授、同志社女子大学交換教授　訳・北垣宗治、大学文学部教授）



同志社校地出土の埋蔵文化財（4）

鈴木　重治

叩き唐津飴釉壺

同志社同窓会館・幼稚園地点出土（安土・桃山時代）残存高一六・八㎝、底径一六・五㎝、胴部最大径一九・二㎝

茶人たちの間では、一楽、二萩、三唐津という格付が現在でも生きている。「楽の世界」や「萩の世界」は、すでに茶陶意識が前提として存在していて、類型化の傾向が強いのに対して、「唐津の世界」は、その出発点が雑器であることによって、意識過剰の脆弱さがなく、機能性に富んだ陶器の底流を的確に捉えている点でも、個性的である。

唐津陶の出現の時期については、多くの見解があるが、考古学的には、天正年間（一五七三～一五九二）にその初現が認められている。これも発掘調査の進展による近世の土器・陶磁器の編年研究の成果である。

同志社同窓会館・幼稚園の新築に先立つ発掘調査でも、中世の寺院址や近世の公家屋敷に伴う遺構・遺物が検討され、多くの資料が出土している。ここに示した「叩き唐津飴釉壺」は、一九七九年十月下旬に「SK2032a」と呼ばれた土坑から出土したものであり、瀬戸の肩衝茶入、丹波の擂鉢、多量の土師皿が伴出している。

年代は、土師皿の編年的位置から天正年間でも前半に属するものと考えられる。したがって、初現期の唐津陶であることが認められる。なお、丸味の強い肩部や底部の大きい安定したプロポーションと共に、内体部の全面に認められる叩き技法に伴うあて木痕の青海波や、全面に施釉された木灰釉も特徴的である。

（同志社大学校地学術調査委員会調査主任）

留学雑感

凌　文　輇

(一)　民衆教育

新島襄は同志社大学設立の旨意の中において「一国を維持するは、決して二三英雄の力に非す、実に一国を組織する教育あり、智識あり、品行ある人民の力に拠らざる可からず、是等の人民は一国の良心とも謂ふ可き人々なり、而して吾人は即ち此の一国の良心とも謂ふ可き人々を養成せんと欲す」と述べている。このことばは同志社の教育理念を明確に指し示している。新島襄は人民こそが歴史の主役であり、またその創造者であるとの信念に立脚して一国の発展と維持は少数の英雄の力で実現できるものではなく、『教育あり、智識あり、品行ある人民の力』によらなければならない。したがって、教育の基本的な目的は『智識あり、教養ある』多数の人民を養成することにあるとしているのである。明治維新以来急速に日本を発展させた基礎は、このような新しい理念にもとずく教育の普及があってのことと思う。

中国は人口十億の巨大な国である。その国において四つの現代化を実現しようとすることはとても少数の人々の努力だけで実現できるものではない。全民族の文化水準と教養を高めなければならないのである。目標を達成するためには国の力だけではなく、全国民の力に拠らざる可からずと思う。全国民を動員し、教育を普及し、すぐれた人材を養成する事こそ、中華民族の「出路」だと信じている。

現在では中国には『私学』はないけれども、民衆教育の理念を生かして国の教育の普及を図るならば、中国の教育は大きい発展を遂げるのでないかと信じている。

(二)　集団主義

同志社の人たちとの交際を通じて日本民族の特徴――集団主義をはっきり見たという気がする。集団主義は非常に濃厚な家族主義的な色彩を持っている。

日本の企業経営の強さの秘密の一つとして、この集団主義があげられている。

㈢ 先生と弟子

同志社大学の研究室は一つの小さい社会集団をなしている。指導教授とそのゼミの学生の間の団結の強さはそのほかのどんなグループのそれよりも強いと思われる。教授は学科目の先生で、院生はその後継者達だが、その親しい関係は一時的なものではなく、一生涯にわたって保たれる先生と弟子との関係である場合が多いと聞く。

㈣ 同窓

学生間には上級生、同級生、下級生などの区別がある。これをひとまとめにして同窓と言う。

心理学科の卒業式に二度出席したが、同志社心理学同窓会の会長も毎年参加している。同窓会では雑誌を出版してお互いの情報を交換し、連絡し合いその友好のきずなをしっかりと結び合わせている。

同志社における中国人留学生の人数は年々増えている。留学生達は、中国において「同志社中国留学生同窓会」を設立するつもりでいる。この同窓会は中国人留学生間の親睦ばかりでなく、同志社との交流を一層深めていきたいと願っている。

㈤ 同志社人

偶然の出合いであっても私が「同志社大学の留学生です」と言うのに対して、その人も「私も同志社出身です」といわれるとたんに親しい気持ちがわいてくる。そして話題もすぐ同志社のことになる。

留学のため同志社に到着したばかりの時に、上野総長主催の歓迎会で、私は挨拶として次のような話をした。即ち「今、私は同志社の一員になったという誇りをもっております…私は諸先生方をはじめ皆様が今日から私を同志社の一員と見なして下さることを切望してやみません」。この二年以来、同志社の先生方はたしかに私を同志社人の一員として見なして下さっており、私も〝同志社人〟としての誇りを感じている。

いよいよ帰国の時が迫って来たいま、同志社に深い感謝の言葉を申し述べたい。だがしかし私の言語能力ではそれを充分に言い表わすことができない。そしてまたどのようにしたら、同志社に対して報恩できるのかと考えれば、やはり同志社で学んだ知識を生かして、中国人民に貢献することだと思う。同志社の先生方もきっとそれを期待して下さることであろう。若し将来私が中国の四つの現代化にわずかでも貢献をすることができたならば、それは最初の挨拶で申し上げたように「これは私ひとりではなくまた同志社の光栄であり、諸先生方の誇りでもあるものと信じます」。

（新島基金招聘第一回中国人留学生）